

# 「山上の説教」における マタイ福音書7章6節の位置づけについて

陶山 義雄\*

## The Setting of Matthew 7:6 in the Sermon on the Mount

Yoshio SUYAMA

“Do not give dogs what is holy; and do not throw your pearls before swine, lest they trample them underfoot and turn to attack you.” Matthew 7:6(RSV)

This enigmatic aphorism, which appears in the New Testament only in Matthew (a second form is also preserved in Thomas 93:1~2) has frequently been discussed because of its inimical nature and in the context of the Sermon on the Mount, or of the Gospel of Matthew. This saying betrays Jewish esoteric instructions to set them apart from the Gentiles: namely the holy rituals of the Jews must not be profaned by dogs and swine (gentiles). If the author of the Gospel received this saying from independent source material either oral or written, it must have been transmitted in the Jewish Christian community where he was raised. Matthew 7:6 is significantly so dissimilar to the teachings of Jesus, and of the contents of the Gospel of Matthew, that it is regarded as the *crux interpretum*.

The first half of the saying, “Do not give what is holy to the dogs...” is cited in the Didache: The Teaching of the Twelve Apostles 9:5. In order to sanctify their rite of eucharist, the author of this Christian instructional manual asserts that the unbaptized are dogs and are not accepted at the table of the Lord's Supper.

The difficulty is whether the author of Matthew held intolerant sectarian beliefs and set it in the Sermon on the Mount. U. Luz and several other scholars abandoned their efforts on its interpretation, because it had no apparent connection to the rest of the Gospel of Matthew. A majority of the scholars, however, regard 7:6 functioning as a footnote to the preceding pericope, vv.1~5 (“Judge not”). By placing 7:6 after the stern precept of not judging others, the evangelist attempts to neutralize extreme interpretations of the saying. From those (dogs and swine) who are not ready to accept the authentic teaching of Jesus (what is holy = pearls), it must be kept secret.

This essay attempts to shed new light on 7:6 from the perspective of the Golden Rule (7:12). The author of this essay will investigate the evangelist's editorial work, and clarify what he intended to convey. The author of Matthew places this prejudiced sectarian aphorism prior to the Golden Rule:

1. An Intolerant Custom to be transformed (Dogs and Swine) by the Golden Rule (7:6)
2. Exhortation to Constant Pursuit and Prayer in Response to the Grace of God, the Father (7:7~11)
3. The Golden Rule (7:12)

---

\* 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授  
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

Presumably the evangelist grew up among Jewish Christians, therefore he could share the esoteric view of 7:6, but as the Christianity and its gospel message spread into the gentile world, he recognized the need of a more accepting and open fellowship. In order to respond to the situation of his community, the evangelist seemed to have two goals: one primarily for the Jews, and another for the gentiles (Matt.15:21~28). He sought to overcome the intolerance of the Jewish Christians, and transform it to embrace world mission. This explains why he concludes his Gospel with the Great Commission of the risen Christ for world mission (28:16~20). and This also clarifies the section on Galilee of the Gentiles (Matt.4:15; Isaiah 9:1~2), where Jesus started his ministry. Likewise, the Gospel of Matthew describes astrologers, undoubtedly gentile, from the East who came to worship the infant Jesus when he was born (2:1~12).

After 7:6 is seen through the Golden Rule, the esoteric saying fits in well with the entire message of the Sermon on the Mount as follows:

#### The Scene and the Audience (5:1~2)

##### I . Invitation to the Blessings of Jesus (Beatitudes) (5:3~12)

##### II . Remarkable Features of the Followers (Christians) (5:13~16)

Discipleship as the Salt of the Earth (5:13), and the Light of the World (5:14~16)

##### III . Christian Righteousness (5:17~6:18)

###### 1. Prologue (A Greater Righteousness Supplanting an Old Jewish One) (5:17~20)

###### 2. Exposition of the Greater Righteousness (5:21~6:18)

###### A. The New Orders versus the Old Commandments (5:21~5:48)

i ) Against Anger (5:21~26)

ii) Against Adultery and Divorce (5:27~32)

iii) Against Oaths (5:33~37)

iv) Against Retaliation (5:38~42)

v ) Love of One's Enemies (5:43~48)

###### B. The New Rituals versus the Old Ones (6:1~6:18)

i ) On Giving to Charity (6:1~4)

ii) On Prayer (6:5~15) (The Lord's Prayer 6:9~13)

iii) On Fasting (6:16~18)

##### IV . The Christian Ethics (6:19~7:11)

###### 1. Serve God, and not Mammon (6:19~24)

###### 2. The Highest Way of Life (Responding Life to the Care of God) (6:25~34)

###### 3. Unlimited Pursuit of Internal Sanctions (7:1~5)

###### **4. An Intolerant Custom to be Transformed (7:6)**

###### **5. Exhortation to Constant Pursuit and Prayer in Response to the Grace of God (7:7~11)**

###### **Concluding Summary THE GOLDEN RULE (7:12)**

##### V . Finale(7:13~27)

###### 1. Enter this Narrow Gate for Salvation, or Else to Destruction (7:13~14)

###### 2. Beware of the False Prophets(7:15~16)

###### 3. How to tell Good Trees (Prophets) from the False Trees (7:17~20)

###### 4. Final Judgment (The Kingdom of Heaven, or Hell) (7:21~23)

5. Concluding Exhortation with the Parable of the Two Houses

(the House Built on Rock, and the House Built on the Sand) (7:24~27)

Concluding Rubric: Reaction of the Crowds 7:28~29

Adherence to the Golden Rule has the potential to end hostilities, enmities, or strife by intolerant religious sects throughout the world. We learn this from the survey of Matthew 7:6 as the author of Matthew places it before the Golden Rule.

キーワード：マタイ7章6節

keywords：Matthew 7: 6

## I. 問題提起

マタイによる福音書7章6節：

「聖なるものを犬どもに与えてやるな。また、きみたちの真珠を豚どもの前に投げ与えるな。さもないと、奴らは足でそれらを踏みつけ、向き直ってきみたちを噛み裂いてしまうだろう。」

上記の言葉は注解者を困らせてきた聖書の言葉である。困惑の理由はユダヤ教的思想が露骨に表明されていて、異教徒や異邦人に対する排除の姿勢が見られるので、到底イエスの言葉とは思えないことが第1点、加えて、後述するように、異邦人を含めた世界宣教を意図するマタイ福音書記者の思想<sup>(1)</sup>にも反する言葉であることが第2点、そして更に、「山上の説教」の文脈と、この言葉が置かれた前後関係ともなじまない、云わば、孤立したような言葉であるからである。そこで、以前からこの言葉は *crux interpretum* (解釈の難所)<sup>(2)</sup> と呼ばれていたのであるが、筆者はこの論文において解決への新しい道を提起したい。Crux は難所、難解な問題を意味すると同時に、ラテン語では十字架、問題の決定的重要点、中心点をも意味しているが、この言葉の「山上の説教」における位置づけを解明するなかで、マタイ福音書記者の真髄に迫る試みを開示したいと考える。

今までのマタイ福音書の注解者たちについて、7章6節についての対応は以下の3タイプに

類分けできるであろう。第1類は先に述べた難問3点のいずれかを理由にして、7章6節を「山上の説教」の文脈から切り離して、マタイ福音書記者の意図を詮索することも放棄する立場の人々である<sup>(3)</sup>。しかしこれは7章6節を無視し、とりわけマタイ福音書記者がこの箇所はこの語録を置いている事実を目を背ける訳であるから、理解を放棄しているに過ぎない。それほど難解な箇所であると云うべきであろうか。

第2類は7章6節を、その直前に置かれている1~5節と結びつけ、これを補足、もしくは修正するためにマタイ福音書記者が残した、とする見解である<sup>(4)</sup>。『新共同約聖書』は7章6節を独立した段落を取ることなく、これを1~5節に連続するペリコーペとして載せているが、おそらく翻訳者はこの立場を支持していると思われる。

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず、自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあ

ながたたにかみついてくるだろう。」(7:1~6)

罪を裁く際に、他人に対しては厳しいが、自分に対して甘い姿勢を戒め、むしろ「人を裁くな」、と云う実行不可能とも思える戒めを和らげる目的で7章6節が付加的に用いられている。つまり、7章1~5節の戒律を制限して、実行可能なものにするための欄外の注として受け止める注解者が大多数を占めている<sup>(5)</sup>。だが、1~5節は罪の問題への対応をテーマとしているのに対して、6節は「聖なるもの」と「穢れたもの」の峻別を問題にしているのであるから、裁きの禁止を緩和させるために6節が置かれたとするには、内容が相即しない。従ってこの見解は支持し難い。

第3の見解は7章6節を単独の言葉として、「キリスト者の義」を説明する6章19から7章12節までの文脈の中で捉える立場である。旧くはE.ローマイヤーが提示していたが、彼は7章4~11節を新しいペリコーペとしながらも構成にかかわる解説と、この部分の注解を放置している<sup>(6)</sup>。同様の見解はM.E.ボーリングによって受け継がれている<sup>(7)</sup>。両者が同じ根拠をもってそのように捉えていたのかどうかは不明であるが、後者は注解のなかで、「キリスト者の義」をマタイ福音書記者は「聖なるもの」として訴え、「犬や豚」をもって表された異邦人、異端者、あるいは棄教者への無駄な働きを戒めるための警告を述べている、とするのである。この見解では7章6節の言葉の内容をそのまま生かしてはいるが、弟子派遣のメッセージで「すべての民をわたしの弟子にきなさい」と云う託宣内容と整合しなくなる点をどう考えたら良いのか。また、イエス自身がこのような排他的言動を表していたとは思えないこと、更に「山上の説教」のなかでも「敵への愛」を述べている箇所(5:43~47)と内容上も矛盾を来たしてしまう所を如何に乗り越えることができるであろうか。第3類に属する注解者が殆どいない理由も窺えよう。

この論文では上記の夫々がかかえている問題を踏まえて、新たな理解を促すべく、とりわけ

7章6節の「山上の説教」における位置づけに焦点を合わせて、以下に展開したい。

## Ⅱ. 7章6節の釈義

### 1. 本文批評：

Μὴ δῶτε τὸ ἄγιον τοῖς κυσί-  
μην δὲ βάλητε τοῦς μαργα-  
ρίταις ὑμῶν ἐμπροσθεν τῶν  
χοίρων, μὴ ποτε καταπα-  
τήσουσιν αὐτοὺς ἐν τοῖς  
ποσίν αὐτῶν καὶ στραφέν-  
τες ρῃξουσιν ὑμᾶς.

テキストの異読について問題になるのは1箇所、上記本文の一重下線部の動詞が未来時制であるが、シナイ写本ではアオリスト(不定過去)時制になっている。これは同じく条件文内にある今ひとつの動詞(二重下線部)がアオリスト時制であるのに合わせて、文法的には時制を後者に揃えた方が条件文内の動詞としては正しい。しかし、修正していない方が、原初のテキストであったと思われる。写本としても大多数が上記テキストの読みを支持しているし、意味の上でも相違が生じることもないのでこれを採用する。

### 2. 語句の解析

τὸ ἄγιον：ギリシャ語の ἄγιος は新約聖書において230回使われている<sup>(8)</sup>。うち、90回は「聖霊」(πνεῦμα ἄγιον)のように「霊」(πνεῦμα)を伴って用いられている。(τὸ) ἄγιον は7章6節の他に、ルカ福音書2章23節とヘブライ人への手紙8章2節にある。いずれも「神に属することがら」を指している。7章6節の中姓名詞化された言葉は具体的に「神殿に捧げられた肉」(レビ記22:10~16)を意味している<sup>(9)</sup>。「山上の説教」では神殿祭儀が問題になっていないので、ローマの信徒への手紙12章1節でパウロが語っ

ているように、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生贄 (*θυσία ἀγια*) すなわちキリスト者 (集団) を表すことも考えられる。しかし、後述するように、7章6節で始まるペリコーペの頂点に「黄金律」(7:12) が置かれているが、この掟を含めて「山上の説教」の中でキリスト教律法としてマタイ福音書記者が編纂してきた内容全体を指して「聖なるもの」と捉えるのが最も相応しい。パウロもローマの信徒への手紙7章12節で「聖なるもの」について類似の使い方をしている：「律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして清いものなのです。」

*μαργαρίτης*：「真珠」は新約聖書に9回登場し、マタイ福音書で3回、1テモテで1回、黙示録で5回用いられている<sup>(10)</sup>。つねに貴重品として扱われている。地中海周辺で初めから珍重されていたものではなく、アレキサンダー大王の東征以降、インドやペルシャなどから移入されたものである。「神の国」が「真珠」に譬えられるほどであり、(マタイ13:45)、7章6節では「聖なるもの」が如何に貴重なものであるかを真珠によって比喩的に表されている。ラビ文献では、「ラビの見事な発言、あるいは律法の解釈を真珠になぞらえている。」<sup>(11)</sup> が、「山上の説教」では収録されたイエスの見事な教えとして「真珠」に譬えられている。

*κύων*：「犬」は聖書では軽蔑すべき動物としてみられている<sup>(12)</sup>。ペットではなく、半野生的存在で、「強欲、徘徊、ごみや捨てられたものを食べ歩く」(出エジプト記22:30)、生き物のなかで最低の存在(コヘレト9:4、他)として旧約聖書に登場する。新約聖書では「うろつき回り汚物をなめる」(ルカ16:21) 姿で登場したり、「魔術を使う者、みだらなことをする者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行ふ者の筆頭に、犬のような者」(黙示録22:15, 16) として聖徒の集団から排除されるべき存在を代表している。更に2ペテ

ロ2:22では異端者、棄教者、教会にとって危険分子で破壊的存在として豚と並んで犬が挙げられている：「ことわざに、『犬は、自分の吐いたもののところへ戻って来る』 また、『豚は、体を洗って、また、泥の中を転げ回る』と言われているとおりのことが彼らの身に起きているのです。」 7章6節に挙げられた「犬」はマタイが真珠として尊重する「聖なるもの」を拒み、理解できそうもない相手を2ペテロでも併記されている「豚」と共に遺棄すべき相手として用いている。「聖なるもの」を「犬」から遠ざける忠告は、出エジプト記22章30節にもある。：「あなたたちは、わたしに属する聖なる者とならねばならない。野外でかみ殺された肉を食べてはならない。それは犬に投げ与えるべきである。」 このように「犬」はユダヤ的背景をもった差別的、侮蔑的言葉であることは避けられない。7章6節が難解な箇所と言われる理由もここにある。

*χοίρος*：「豚」は上記の「犬」と同様に穢れた、忌むべき動物として聖書に登場する(レビ記11:7)。新約聖書では12回登場するが、いずれも異邦人と結びついている<sup>(13)</sup>。イエスが狂人から悪霊を追い出したところ、それらが豚の群れの中に入った物語(マルコ5:11~16; 平行箇所)は異邦の地・デカポリスで起きている。また、放蕩息子が豚飼いにまで身を落としたのも、遠い異邦の国であった(ルカ15:13~16)。7章6節では「豚」が「犬」と併記されているが、両者とも不潔で避けるべき動物であることが強調されると共に、「豚」によって、「異邦人」や「異教徒」が暗示される。彼らは律法を守らない人々であるから、忌み嫌い、避けるべきである、と言う極めてユダヤ的発想が7章6節を生み出している。律法(「聖なるもの」、「真珠」)に対して無理解であるばかりでなく、それを投げあたえても、それらを足で踏みにじり(ギリシャ語本文一重下線部)、向き直ってわれわれ(聖徒たち)を引き裂こうとする(本文二重下線部)種族が「豚」(猪)

という言葉で示された内容である。ここにcruz interpretumの所在がある。

## 2. Q資料と7章6節

マタイ福音書記者は7章6節を、福音書を編纂する際に持ち合わせていた資料から入手したと思われる。その証拠に、同一の語録が、トマスによる福音書93に見受けられるからである。；「犬どもが糞の山の上に投げるといけないから、神聖なるものを犬どもにやるな。豚どもが{・・・}するといけないから。真珠を豚どもに向けて投げるな。」<sup>(14)</sup>。写本に判読できない{・・・}部についてH.W.アットリッジが、特に言及しても差し支えないと思える復元案を提示している<sup>(15)</sup>。：

「豚どもがそれを{つまらないもの}にするといけないから」

「豚どもがそれを{無駄}にするといけないから」

「豚どもが{それを細かく碎いて粉々に}するといけないから」

入手できる他の「トマス福音書」テキスト<sup>(16)</sup>には復元案が無いだけに、これは興味深い。3つの案は共通して「豚どもには役に立たない」ことを推察させているが、とりわけ「細かく碎いて粉々にする」、はトマス福音書の記述をマタイのテキストに近づけている。

マタイが福音書を編纂するにあたって手元に持っていたと思われる資料はマルコ福音書、Qと呼ばれているマタイとルカが共通に持ち合わせていた資料(Q資料)、それにマタイの特殊資料である。7章6節がユダヤ的思考形態を色濃くもっているのは、それが、諺として流布していた中で、イエスも用いたか(その場合には彼特有の皮肉と逆説的文脈の中で)、あるいは、ユダヤ人キリスト者の間でそのような思考形態を持ち合わせた集団によって生み出された言葉の可能性が考えられる<sup>(17)</sup>。それがQ資料に留められ、マタイがそのまま「山上の説教」に残したとすればどうなるか。ルカ福音書の当該箇所に残されていない訳であるから、ルカ

自身がこれを削除した筈である。事実、7章6節の内容は異邦人伝道への視野をもって(使徒言行録)、福音書をも纏め上げようとするルカの思想とは全く相容れない言葉である。マタイ福音書記者はなぜルカ同様に、これを削除しなかったのであろうか。ルツによれば、マタイはQの語録をそのまま載せただけの「保守的な著者であった」<sup>(18)</sup>から、マタイの意図する文脈に適合しないものをそのまま残してしまった、と言う。だから、U.ルツは7章6節を「山上の説教」からも、またマタイ福音書全体からも切り離して解釈を放棄するのである。だが、果たしてマタイはそれほど伝承に忠実であるだろうか。彼が意図的に削除したと思えるQ資料の箇所について、同じことをルツは主張できるであろうか<sup>(19)</sup>。むしろ、Q資料の配列を忠実に守って「平地の説教」を纏め上げているルカ福音書記者とマタイの「山上の説教」とを、資料の配列について比較検討を加えるならば、マタイが7章6節を残した理由がルツの指摘しているような消極的態度でない所を、マタイの編集作業を通して理解できるであろう。以下にQ資料が「山上の説教」と「平地の説教」でどのように配置されているかを対観することによって、マタイ福音書記者の意図を探る手がかりとしたい。(対観は次頁冒頭の表)

「山上の説教」は5章から7章の3章にわたり、全111節に及ぶ長大な説教であるのに対して、ルカがQ資料に従って纏めた「平地の説教」は1章にも及ばず、僅か32節で終わっている。マタイ7章6節がQ資料にあったとすれば、ルカはマタイと同じく、「求めよ、捜せ、門を叩け」(ルカ11:9~13)にあった筈である。マタイの際立った編集作業では、「黄金律」をQ資料の位置から切り離して、下記太字で表した「人を裁くな」、「偽善について」、それと「求めよ、捜せ、門を叩け」の後にマタイ福音書記者は置いている、と言う事実である。更に、本論文では、例の7章6節を福音書記者が「求めよ、捜せ、門を叩け」の直前に置いた理由が、彼の編

「山上の説教」におけるマタイ福音書7章6節の位置づけについて

	「山上の説教」	「平地の説教」
	マタイ5：1～7：29	ルカ6：12, 17, 20～7：1
導入：	5：1～2	6：12, 17, 20
祝福	5：3, 6, 4, 11, 12	6：20b～23
呪い	(マタイは削除)	6：24～26
敵への愛	5：43～44	6：27～30
復讐するな（前半）	5：38～42	6：29～30
	うち41節(1ミリオンの強制には2ミليون行け)をルカは削除	
黄金律	7章12節	6章31節
復讐するな（後半）	5：46, 47, 45	6：32～35
完全・慈悲深くあれ	5：48(慈悲を完全に変更)	6：36(Qのまま「慈悲深くあれ」)
人を裁くな	7：1～2	6：37～38
盲人の道案内	(15：14) 説教外	6：39
師と弟子	(10, 24, 25) 説教外	6：40
偽善について	7：3～5	6：41～42
犬と豚の比喩	7：6	ルカは削除
実で見分ける善悪	7：16～20	6：43～45
家と土台（岩と砂上）	7：21～27	6：46～49
説教の終わり	7：28, 29	7：1a

集作業から読み取れる次第を後に展開したい。その前に、Q資料からマタイが「説教」の枠外に置いた語録をルカではどこに配置しているかを対観しておこう。ルカは、おそらくQ資料の配置に従っていると思われる。

	マタイ福音書	ルカ福音書
主の祈り（前半）	6：9～13	11：2～4
祈り（後半～信頼）	7：7～11	11：9～13
灯火と燭台	5：14～15	11：23
心と目	6：22～23	11：34～36
思い悩むな	6：25～33	12：22～31
Q以外：マタイによる結び、34：だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。		ルカによる結び、32：小さな群れよ恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。
天に積む宝	6：19～20	12：33～34
狭き門	7：13, 14, 22～23	13：24, 26, 27
(閉められた戸)	25：10～12	13：25
地の塩	5：13	14：34, 35
律法について	5：18	16：17
離婚の禁止	5：32	16：18

(マタイの付加：姦淫以外は離婚の禁止)

「犬と豚の比喩」(マタイ7：6)が「偽善について」(マタイ7：3～5//ルカ6：41～42)に付随してQ資料に置かれていたのか否かは不明である。「祈り（後半～信頼）」(マタイ7：7～11//ルカ11：9～13)の直前にそれが置かれていたとは、ルカの文脈から判断すれば、ありえなかったであろう。マタイがこれをQ資料以外の所から持ち込んだ可能性は十分ありうることである。仮に上記の一覧で表したように、「偽善について」へ付随して置かれていたとしたら、先に掲げた7章6節の理解に関する3類型の中で、第2類、即ち、「裁きの禁止」(7：1～5)に対する補足説明であり、犬や豚で暗示しているような、掟の無理解者たち、従って「聖なるもの」、「真珠」の値打ちも分からず、それを冒瀆する者たちから聖徒集団を守るために、Q資料の段階ですでに付加された、と考えるのが至当であろう。E. シュワイツァーは第2類を支持してこう結んでいる：「福音の明るい響きを、教会にける懲戒や、兄弟への警告でもって打ち消してしまうことから、教会を守るようにしなくてはならないのである。」<sup>(20)</sup> おなじ類型に振り分けた注解者のなかでも7章6節をシュワイツァーとは異なる背景で捉えている者もいる。筆者の恩師、W.D. デーヴィスはラビ文献と聖書を比較検討する特異な学者であるが、ラビ的ユダヤ教指導者が施した旧約聖書の注解(ミシュナー)の1つであるゲマラの律法注釈に7章6節の用法が類似している、と言う。<sup>(21)</sup> 律法が厳格でありすぎると、実行不可能に陥るところを、律法を損なうことなく、実行可能な限界点まで解釈によってラビたちは乗り越えようと謀っている。人を裁くことを一切禁じた7章1～5節を、余りに文字通り理解することがないように、7章6節をゲマラに倣って置いたのである、と言う。同様の措置をマタイは「離婚の禁止」に対して援用し、「姦淫以外の理由で」妻を離縁するものは」と下線部加えて実行可能な掟に改めている、とする。もし、そうであるならばマタイ福音書記者自身が、独自に(Q資料に依存せず)7章6節の諺を「裁きの禁止」

に結び合わせたのであるかも知れない。博学の師であるから、この説は捨て難い。だが、7章6節は、マタイ福音書記者が「黄金律」を「山上の説教」の頂点に据えるその前座に置いて、新たな意味を付与している事実注目したい。

### 3. 伝承に由来する7章6節

初期キリスト教文書の1つに『12使徒の教訓』（通称『デイダケー』）がある。マタイ福音書記者と同時代、もしくは少し後、1世紀末から2世紀初頭に記されたものと考えられている<sup>(22)</sup>。マタイに類似した文書が収録されているが、『デイダケー』がマタイ福音書を利用しているのか否かは、決定し難いが、もし、異なる資料に基づいてかかれたものであるとすれば、7章6節もそのような背景を持つ言葉、諺となる。だが、マタイを知っているか、マタイ福音書を用いていた教会の指導者、もしくは、信者が著した文書と看做す方が妥当であろう<sup>(23)</sup>。そうであるにしても、7章6節がマタイ以降、教会でどのように理解され、用いられていたのかを知る上でも重要な文書であることに相違ない。

7章6節と同様の諺は『デイダケー』の第二部（7章～10章）の「教会生活の儀式的側面に関する規定」で、洗礼、断食、祈り（「主の祈り」を含む）、聖餐に関する記述である<sup>(24)</sup>。7章6節の諺は『デイダケー』9章5節に収録されている：

「主の名をもって洗礼を授けられた人たち以外は、誰もあなたがたの聖餐から食べたり飲んだりしてはならない。主がこの点についても、『聖なるものを犬に与えるな』と述べておられるからである。」<sup>(25)</sup>

『デイダケー』ではマタイ7章6節を教会が執り行う聖餐式と結びつけ、未洗礼者が聖餐に与ることを戒めるにあたって、その論拠を主が「聖なるものを犬に与えるな」と言う言葉に置いている。つまり、7章6節は「裁きの禁止」を緩める補足的な意味として捉えられているのではなく、秘儀的に捉えられている。聖餐を部外者から排除し、教会人（「聖なるもの」）を犬

（未信者）から区別する教えとして有難く受け止めている。マタイ福音書記者自身も7章6節を『デイダケー』と同じく秘儀的、祭儀的に捉えて7章6節に置いている、と主張する注解者もいる程である<sup>(26)</sup>。これは「山上の説教」全体に関わる問題であり、果たしてマタイはキリスト者、キリスト教理解者だけを対象にして福音書を著したのであろうか。「敵への愛」（5：44）や、「自分の兄弟を越え出た挨拶」（5：47, 48）を掟に据えるマタイには相応しくない理解である。むしろ、7章6節の諺は『デイダケー』を生み出した教会と同じ土壌から作られた言葉ではなかったであろうか。ここには偏狭なユダヤ人キリスト者の排他性が露骨に表わされている。そのようなユダヤ的性格から、ユダヤ人キリスト者の間で犬や豚によって異邦人が、排除すべき穢れた存在として受け止められていたと思われる。このような思想的背景をもった諺をマタイ自身が「山上の説教」に取り入れたのであれば、我々はマタイ自身の思想を今や問うべき段階に来ている。秘儀、奥義的にキリスト教倫理を纏めているとすれば、「聖なる掟」を無責任な無理解者、局外者に曝すようなことがあってはならないと。だが、「敵への愛」、「兄弟外の人への挨拶」、さらにマタイ福音書記者が至上の掟としてこれから提示しようとする「黄金律」（7：12）とは矛盾する内容であると言わざるをえない。やはり、難解な箇所である。

### Ⅲ. マタイ福音書記者の「異邦人」への姿勢と7章6節

マタイ福音書記者は異邦人に対する積極的姿勢、とりわけ、今後の伝道の相手として近づこうとする姿勢が読み取れる反面、7章6節に代表されるような否定的とも受け取れる姿勢も見え隠れする矛盾した両面をもちあわせている。イエスの言動を纏めようとすれば、いきおい、開かれた宣教がイエス自身からほとぼしり出るわけであるから、積極的姿勢はイエスの思想と調和する。だが、マタイ自身は「デイダケー」



と同じく偏狭なユダヤ性を保持し続けていたの  
であろうか。イエスの普遍的愛の思想とマタイ  
の偏狭なユダヤ的思想が、矛盾した両面性をあ  
らわして福音書内に露呈しているのであろう  
か。マタイを偏狭なユダヤ的思想の持ち主と決  
め付ける前に、彼がマタイ福音書のなかで異邦  
人への言及記事をどのように扱っているのかを  
見ると、その姿勢も明らかになるであろう。

マタイ福音書では「異邦人（ $\epsilon\theta\nu\omicron\varsigma$ ）」  
が11回登場する<sup>(27)</sup>。マタイ4：15；5：47；  
6：7；6：32；10：5；10：18；12：18；12：  
21；18：17；20：19；20：25 である。この  
うち、5：47；6：7，32；はQ資料によるので、  
20：19，25のマルコ資料による受難予告の記  
述と合わせてマタイ福音書記者への検討材料か  
ら除外する。

4章15節は、イエスの宣教活動がガリラヤか  
ら開始されたこと（マルコ1：14，15；ルカ  
4：14，15）に、マタイがイザヤ書8章23節と9  
章1節を加えて、それが預言の成就であることを  
意味づけた箇所である。「異邦人のガリラヤ」  
は、従ってマタイの加えた言葉ではない。しか  
し、預言の成就をマタイが弁証するために用い  
たイザヤ書にそれはあった、と言うのであるが、  
そればかりでない。イエスの宣教が異邦人を対  
象にしていることを、マタイは視野に入れている  
のである。マタイの時代にはガリラヤは、も  
はや、異邦人の地ではなかったのに、敢えてイ  
ザヤの記述を持ち込んだのは、宣教開始を異邦  
人伝道と結びつける意図があった、と考えられ  
る。マタイはイエスの誕生物語で、占星術の学  
者たちが幼子イエスに拝謁するために東方の国  
から来訪させているが（マタイ2：1～12）、こ  
れも異邦人への宣教拡大を視野に入れたドラマ  
としてマタイは収録しているのである。

マタイ12章18，21節も、イエスが安息日に  
病人を癒した出来事（12：1～8；9～14//マル  
コ、ルカ平行記事）が、預言の成就であることを  
弁証するために、マタイがイザヤ書42章1～  
4節を引用した箇所である。しかも、この場合  
にはイザヤ書には必ずしも「異邦人」ではなく、

「国々」であったり、「島々」と書かれていたり  
する部分を、マタイ自身が「異邦人」に書き換  
えている。以下の文章中、括弧内の文は新共同  
訳によるイザヤ書の当該箇所である。

「見よ、わたしの選んだ僕、わたしの心に適  
った愛する者。この僕にわたしの霊を授ける。  
彼は異邦人に正義を知らせる（国々の裁きを導  
き出す）。彼は争わず、叫ばず、その声を聞く  
者は大通りにはいない。正義を勝利に導くまで、  
彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さ  
ない。異邦人は彼の名に望みをかける（島々は  
彼の教えを待ち望む）。」

70人訳ギリシャ語の旧約聖書が、当該箇所に  
ついて、18節では  $\tau\acute{\alpha}\ \epsilon\theta\nu\eta$ （複数形でユ  
ダヤ人以外の諸国民、外国人を指す）と訳され  
ているので、マタイは70人訳に倣っているこ  
とが考えられる。しかし、21節は  $\epsilon\pi\iota$   
 $\tau\eta\ \gamma\eta$ （地の上に）であり、この部  
分を「異邦人」に改めたのはマタイ福音書記者  
であることが分かる。

異邦人伝道への開かれた姿勢についてマタイ  
記者が明確に持ち合わせていたからこそ、彼は  
この福音書を締めくくるイエスの復活顕現に際  
して、他の福音書には見られない、弟子たちへ  
のイエスによる託宣を掲げているのではない  
か：

「わたしは天と地の一切の権限を授かっている。  
だから、あなたがたは行って、すべての民を  
（ $\pi\grave{\alpha}\nu\tau\alpha\ \tau\acute{\alpha}\ \epsilon\theta\nu\eta$ ）わたしの弟子に  
しなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗  
礼を授け、あなたがたに命じておいたことをす  
べて守るように教えなさい。」（28：18～20）。  
マタイでは  $\pi\grave{\alpha}\nu\tau\alpha\ \epsilon\theta\nu\eta$ ：「すべての  
民」を表す言葉が他に24：6と25：32にある  
が、前者はマルコ資料から、後者はマタイの特  
殊資料から受けたものを「終末における審判」  
はあまねく世界に及ぶことであり、そのまま載  
せている。

しかし、他方では7章6節のような、偏狭で  
排他的なユダヤ的言葉があるのも事実である。  
マタイが利用したQ資料そのものが、ユダヤ的

言い回しを持っていたことも否めない。Qにはイエスの語録のなかでも、「ファリサイ的、律法主義的、黙示文学的な思想構造」<sup>(28)</sup>が読み取れる。マタイ5：47（「異邦人でさえ、同じことをしているではないか」）は、ルカ6：33にもある言葉である。だが、マタイは調子が弾んで、「施し、祈り」について、偽善者や異邦人のようにしないよう、Qになかった所まで、自分から付け足してしまうのである：「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをしてはならない。」（6：7、8a）

マタイ記者のこのような傾向は、マルコ福音書を利用する中でも見受けられる。「カナンの女の信仰」（15：21～28）は、マルコ7：24～30から受けた記事である。ルカもこの記事を手ししながら、異邦人への露骨な排他性を反映した記述であったために、ルカは削除している。汚れた霊に憑かれている幼い娘を持つ、ギリシャ人でシリア・フェニキア生まれの女が、わが子を助きたい余り、異邦人であるわが身を自覚しつつ、ユダヤ人であるイエスに娘の治癒を願い出る話である。イエスが異邦人からの申し出であるので、差別的な言葉をもって女の願いを拒絶する：「まず、子供たち（イスラエル民族）に十分食べさせなければならぬ。子供たちのパンを取って、子犬にやってはいけぬ。」（マルコ7：27）。子犬 *κυνάριον* も先の「犬」と同じく「異邦人」を軽蔑的に指す言葉である。イエスの宣教はまず同族の民から、という偏狭な発想は、ユダヤ人キリスト者にあったものが、この物語の背景にある。マタイもそのような思想から未だ完全に解放されてはいなかった。むしろ「施し、祈り」の伝承に異邦人への批判を、マタイ自身が加えたように、マルコの伝承に対して、この箇所でも、偏狭的言動についてマタイは火に油を注いでいる：「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところになんか遣わされていない」（マタイ15：24）。マタイのこのような姿勢は、同じくマルコとQ

資料から受け取った「弟子派遣の物語」（マルコ6：7～13//マタイ10：5～15//ルカ9：1～6）にも見受けられる。それがマタイ10章5節に彼が加えた「異邦人」への言説である：「イエスはこの12人を派遣するにあたり、次のように命じられた。『異邦人の道に行ってはならない。またサマリアの町に入ってはならない』」。

我々が主眼とする7章6節は、マタイの「異邦人」への姿勢を検討するなかで、マタイ記者がかなり重視して置いた事情を知ることができた筈である。最後に、7章6節に近い言葉を我々は、18章17節（下記引用下線部）に見出すのである。：「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に扱いなさい。」（18：15～17）マタイはQ資料に由来する、「罪を犯した兄弟への（無限の）赦し」（ルカ17：3～4）を、「教会規定」として編集した「説教集」（18：1～19：1a）のなかに収録している。それも無限の赦しではなく、教会の言うことを聞き入れない脱落した兄弟を、もはや兄弟としてではなく、異邦人や徴税人同様に扱うべき「教会規定」として記している。マタイの教会がそのような規定を持っていたから、このように収録していると思われる。7章6節では脱落した兄弟、もしくは、初めから聞く耳を持たない相手を、「犬」と「豚」に喩えて、「聖なるもの」、「真珠」である教会の教えを守ろうとしているように窺える。聞き入れない者を宣教の対象から外す姿勢と、復活したイエスが弟子たちに伝えた「すべての民を弟子とする」世界宣教の託宣とはどうなるのであろうか。

#### Ⅳ. 7章6節と「山上の説教」の構成

##### 1. 7章6節と「黄金律」

マタイ記者とその福音書が抱えている「異邦人」をめぐる矛盾は、彼自身がおかれていた教会の状況と福音書記者の葛藤にあることを指摘した、日本人による優れた論文がいくつか存在する<sup>(29)</sup>。イエスの宣教活動は主としてユダヤ人の枠内に置かれていたが、それを受け継いだ教会も、当初はユダヤ人キリスト者の集団であった。だが、マタイの時代には教会が異邦人への接触と働きかけをせざるを得ない広がりを持つなかで、異邦人伝道への神学的根拠をマタイ記者は福音書を編纂するなかで示そう試みている。それが、異邦人伝道は預言の成就であった、ということ。いま1つは、復活顕現のなかでイエスが弟子たち（教会）に残した、「すべての民を弟子とする」世界宣教の託宣である。マタイ自身は彼の教会と共に、未だユダヤ人キリスト者の枠内にいたのであるが、世界宣教が必要不可欠であることを認識して、福音書の編纂を通して前に踏み出そうとした。現存在と、あるべき存在の狭間で、異邦人への処遇についても矛盾を露呈している。マタイ記者は何ほどか矛盾を自ら克服しようと試みているのが、イエスの語録を福音書に編纂しようとする働きであったとすれば、我々の7章6節についても、かかる視点をもって読み取る術があるのではなかろうか。

7章6節は、そのあとに続く「求めよ、捜せ、門を叩け」(7:7~8)に始まり、「天の父からの慈愛」(7:9~11)に應えて実践すべき「黄金律」(7:12)と結び合わせたときに、マタイ記者が福音書を編纂した先の意図に最も相応しい理解が可能となる。元々、Q資料において、「黄金律」は、「敵への愛」(ルカ6:27~36)のペリコーペの中に織り込まれた言葉(同6:31)であった。マタイ記者は、これだけを抽出して、「敵への愛」(マタイ5:43~48)から切り離し、「山上の説教」で、ユダヤ教の「律法学者やファリサイ派の義や律法に勝るキリスト教の義と律法」(マタイ5:17~20)に据え

たのである。マタイ記者の教会や、マタイ自身も抱え持っていた偏狭で排他的な言葉(「聖なるもの~真珠」を「犬と豚」から峻別せよ)は、「黄金律」によって克服しなければならないことを、マタイ記者は自覚する一方で、現況では教会内に流布していたこの諺を、頂点(「黄金律」)を示す戸口に置いたのである。7章6節は「黄金律」に取って代えられなければならない。これがマタイ記者による編集の意図である。これがキリスト教律法(義)であり預言者であると、自分の言葉で結んで、マタイは「山上の説教」の主題を締めくくるのである：

「(だから、) 人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」(7:12)

##### 2. 「山上の説教」の構成と7章6節

上記のように7章6節を「山上の説教」の主要部に向かう戸口として位置づけることによって、マタイ福音書記者は「山上の説教」を次のような構成へと伝承資料を組み立て、編集の言葉でつなぎ合わせていることが理解できるのである。

情景と導入： 5:1~2

I. 招き(祝福)の言葉： 5:3~12

II. キリスト者の特質(地の塩、世の光)：  
5:13~16

III. キリスト者の義： 5:17~6:18

1. 序文：律法の完成であり、ユダヤ教を凌駕するキリスト者の義： 5:17~20

2. 新しい義の開示： 5:21~6:18

i) 旧律法に対する新律法(5つのアンティテーゼ)：5:21~48

裁き(5:21~36)；姦淫と離婚(5:27~32)；誓約(5:33~37)；復讐(5:38~42)；敵への愛(5:43~48)

ii) 旧儀礼に対する新儀礼： 6:1~18

施し (6:1~4) ; 祈り (6:5~15) ; 断食 (6:16~18)

IV. キリスト者と至高の倫理: 6:19~7:12

1. 地上の富ではなく天に宝を積む存在・澄んだ目と明るい全身: 6:19~24
2. 思い煩いからの自由な者 (神の恵に應える生き方): 6:25~34
3. 人を裁かず、偽善に陥らない者 (内的制裁の貫徹者): 7:1~5
4. 犬と豚 (異邦人) を分隔てる、克服さるべき偽善の指摘 (7:6)
5. 天の父への信頼を土台とした応答: 求め、探し、門を叩け (7:7~11)  
至高の倫理を貫く総括的掟: 黄金律 (7:12)

V. 結び: 7:13~27

1. 求道の薦め (7:13~14)
2. 偽善者 (羊の皮を着た狼) を警戒せよ (7:15)
3. 良い木と悪い木を実で見分ける教え (7:16~20)
4. 不法を働いてきた者への終末時の裁きと父の御心を行ってきた者の救い (7:21~23)
5. 嵐 (終末) に耐える家の建て方の譬 (砂上ではなく岩の上に家を建てよ) (7:24~27)

説教の終了と聴衆による驚きの反応: 7:28~29

「山上の説教」を以上の構成をもって読むならば、マタイ福音書記者が伝承を如何に良く、自分の著書と言える程までに、自分の主張にまで高めて教会に伝えようとしていたかが、更にはっきりと理解できる筈である。大枠を5つに設定し、更に小枠をも5つに纏めた福音書記者は、良く言われてきたことではあるが、モーセ5書になぞらえて編集しているものと考えられる。また、ルカが「平地」で一連の教えをイエスが述べているのとは異なって、マタイは情景の設

定において、イエスが山に登り (5:1)、説教が終わって、山を降りる (8:1) のも、モーセが十戒を授かった情景 (出エジプト19:20~25) になぞらえている<sup>(30)</sup>。また、「山上の説教」を含めて、マタイ記者はイエスの教えを5つの説教集として編纂している、と見做す見解もある。それは、7章28節で、「イエスがこれらの言葉を語り終えられると・・・」とあるが、この言葉をマタイ記者は編集句として、合計5箇所 で用いているからである (7:28; 11:1; 13:53; 19:1; 26:1)。それぞれにタイトルを付けることも可能であるが、マタイ記者による内容の見事な統一と構成は「山上の説教」にしか見られない。7章6節は、マタイ記者がこれを「黄金律」で包み込むことによって、マタイが自分自身もユダヤ性を乗り越えると同時に、教会に向かっても「世界宣教」を勧める教説に仕上げる事が出来たのである。

今日、宗教に起因する戦争が、世界を不幸に陥れている現実直面して我々は憂慮を覚えざるを得ない。イエスが自然法にも基づく「黄金律」<sup>(31)</sup>を提示し、マタイ福音書記者が自分の宗派が抱えていた排他性を、この教えによって克服しようと試みて著した「山上の説教」が、我々の内外にある不幸をも除去する途であろうことを銘記しておきたい。

注:

- (1) マタイ福音書記者が「世界宣教」への視野をもって同福音書を編纂したことは28章19~20節で復活のイエスが弟子たちに語る託宣 (28:16~20) に表されている。本稿第三章で展開する。
- (2) Stendahl, K., *Matthew, Peake's Commentary on the Bible*, Thomas Nelson & Sons Ltd, N.Y., 1962, 780頁より引用。
- (3) Stendahl, *Ibid*; Filson, F.V., *The Gospel According to St. Matthew*, Black's New Testament Commentaries, Adam & Charles Black, London, 1975(2<sup>nd</sup> revised), 104頁; Luz, U., *Das Evangelium nach Matthaeus*, (Evangelisch Katholischer Kommentar zum Neuen Testament I / 1, Benziger Verlag, Neukirchener Verlag, 1989(2<sup>nd</sup>), 381~2頁、同、小河陽訳、EKK 新約聖書注解

- I / 1、『マタイによる福音書』教文館、1990、546～9頁；メイズ編、『ハーパー聖書注解』、Fuller, R.H., 鈴木真也訳、「マタイによる福音書」、1001頁；宮内彰、「マタイによる福音書」、『新約聖書略解』、日本基督教団出版局、1992増補36版、38～9頁；他。
- (4) McNeile, A.H., *The Gospel according to St. Matthew*, Macmillan & Co.Ltd., London, 1957, 91頁；Davies, W.D., *The Setting of the Sermon on the Mount*, Cambridge University Press, 1964, 326頁；同、松永希久夫他訳『イエスの山上の説教』（聖書の研究シリーズ35）、教文館、1991、183頁；同、*The Gospel according to Saint Matthew*, (The International Critical Commentary) vol.1, T & T Clark Ltd., Edinburgh, 1988, 674～7頁；デイトリッシュ、S., 松永希久夫訳、『マタイ福音書』、(聖書講解全書16)、日本基督教団出版局、1966、85～7頁；Schweitzer, E., *Das Evangelium nach Matthaeus*, (NTD Band2), Vandenhoeck & Ruprecht, Goettingen, 1981(3 Auflage), 108～9頁；同、佐竹明訳、『マタイによる福音書』NTD・新約聖書注解刊行会、1978、222～224頁；同、青野太潮・片山寛訳、『山上の説教』、(聖書の研究シリーズ31)、教文館、1989、171～5頁；Strecker, G., *Die Bergpredigt*, (Ein exegetischer Kommentar), Vandenhoeck & Ruprecht, Goettingen, 1984, 151～153頁；ヘア、D.R.A., 塚本恵訳、『マタイによる福音書』、日本基督教団出版局、1993、147～9頁；小河陽、『マタイによる福音書』（福音書のイエス・キリスト1）、日本基督教団出版局、1996、135頁；アイヒホルツ、G., 村上伸訳、『山上の説教』、日本基督教団出版局、1971、274～277頁；橋本滋男、「マタイによる福音書」（『新共同訳 新約聖書注解 I』）、日本基督教団出版局、1991、65頁；同、『新共同訳 新約聖書略解』、日本基督教団出版局、2000、43頁；他
- (5) 7章6節を7章I～5節の欄外注として捉える中でも2派に分かれている。Davies, W.D., のように「裁きの禁止」を実行可能なものに緩めるゲマラに倣った欄外注とする見解と、大多数は、厳格な律法主義におちいることを戒めて、福音のあるべき姿を示した欄外注として受け止めている。
- (6) Lohmeyer, E., *Das Evangelium des Matthaeus*, (Kritisch-exegetischer Kommentar ueber das Neue Testament Verguendet von Meyer), Vandenhoeck & Ruprecht, Goettingen, 1962(2 Auflage), 9頁
- (7) Boring, M.E., *The Gospel of Matthew* (The New Interpreter's Bible vol. VIII) Abingdon Press, Nashville, 1995, 173頁、212頁を見よ。
- (8) Balz, H., 『ギリシャ語 新約聖書釈義事典・I』、教文館、1981、43頁
- (9) Arndt, W. & Gingrich, F.W., *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, Cambridge University Press, 1957, 9頁
- (10) Pluermacher, E., 『ギリシャ語 新約聖書釈義事典・II』449頁；Hauck, F., *Theologisches Woerterbuch zum Neuen Testament (ThWZNT)* Band IV, Kohlhammer, Stuttgart, 1942、475～477頁、を参照。
- (11) Strack, H. & Billerbeck, P., *Das Evangelium nach Matthaeus* (Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, Band 1), Beck'sche Verlagsbuchhandlung, Muenchen, 1965, 447～448頁を参照。
- (12) Arndt & Gingrich, op.cit. 462頁；Pedersen, S., 『釈義事典・II』、392頁；Michel, O., ThWZNT, Band III (1938)、1100～1103頁
- (13) 同、『釈義事典III』、521頁；Strack & Billerbeck, op.cit. 449頁を参照。
- (14) クロップンボルグ、マイヤー、パターソン、スタインハウザー共著、新免貢訳、『Q資料・トマス福音書』、日本基督教団出版局、1996、208頁より引用。
- (15) 同上、213頁
- (16) Aland, K., *Synopsis Quattuor Evangeliorum*, Wuerttembergische Bibelanstalt. Stittgart. 1964, 528頁；荒井献訳、「トマスによる福音書」『聖書の世界』（第5巻 新約・I）講談社、1970、294頁を見よ。
- (17) Bultmann, R., *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Vandenhoeck & Ruprecht, Goettingen, 1958(4 Auflage), 80～82頁、106～108頁を見よ。
- (18) Luz EKK op. cit. 382頁
- (19) 「山上の説教」でQ資料よりマタイが採用しなかったと思われる箇所：「(祝福と) 呪い」(ルカ6：24～26)、呪い(ルカ6：24～27)部はルカが持ち合わせていた特殊資料によることも考えられるが、マタイはQにあった「貧しい者の

幸い」(ルカ6:20)を自身で「心の貧しい者」(マタイ5:3)へと書き改めるほど、貧者への関心を見失っているのが、*「呪い」*を除去したと見るのが妥当であろう。；「裁きについて」(ルカ6:37b-38a, b)；「狭い戸口」(ルカ13:25-26=マタイ25:10-12)等が挙げられる。

- (20) Schweitzer, NTD, *op.cit.* 109頁より引用。
- (21) Davies, *Setting*, 326頁；松永訳、『山上の説教』、183頁；ICC, *Matthew*, 674頁
- (22) 小高毅編、「十二使徒の教訓 (デイダケー)」、『原典古代キリスト教思想史』、教文館、1999、19頁；佐竹明訳、「十二使徒の教訓」、『使徒教父文書』、(『聖書の世界』別巻4・新約Ⅱ)、講談社、1974、312頁；同、講談社文芸文庫 アC2、1996、456-7頁、などを参照。
- (23) 『デイダケー』がマタイ福音書を用いたと思われる箇所は：1:2 (黄金律)、1:3 (敵への愛)、4:7 (柔和な人たちは地を継ぐ)、6:1-2 (完全への指向)、7:1 (父、子、聖霊の名による洗礼)、8:2 (主の祈り)、9:5 (聖なるものと犬)、10:5 (完全への指向)、11:10 (実によって見分ける偽預言者)、16:3-8 (終末時に出現する偽預言者・羊と狼) などである。
- (24) 佐竹明訳、『デイダケー』、新約Ⅱ、312頁を参照
- (25) 小高編、前掲書、21頁より引用
- (26) 7章6節を教会の祭儀的形式に結び付けて論じているもの、Procksch, *ThWZNT*, Band. (1933)、107頁；Michel, *ThWZ N.T.*, Band (1938), 1102頁；Betz, H.D., *The Sermon on the Mount*, Fortress Press, Minneapolis, 1999, 493-496頁
- (27) Schmoller, A., *Handkonkordanz zum Griechischen Neuen Testament* (Text nach Nestle), Privileg, Wuerth. Bibelanstalt, Stuttgart, 1960 (7 Auflage), 141-2頁
- (28) 新免貢訳、『Q資料』、37-8頁を見よ。
- (29) 田川建三、「マタイ福音書における民族と共同体」、『聖書学論集〜5』、1967、115-132頁；橋本滋男、「マタイ福音書における異邦人の位置」、『イエスとマタイ福音書』、(聖書の研究シリーズ45)、教文館、1994、53-94頁；小河陽、「教会とイエス」、『マタイによる福音書』、290-319頁、などを参照。
- (30) Davies, *Setting*, 14-61頁、同、松永希久夫訳、『山上の説教』、18-34頁；小河、同上、259頁；ルツ、U.、原口尚彰訳、『マタイの神学』

(聖書の研究シリーズ46)、教文館、1996、72頁、などを参照。

- (31) 「黄金律」が他宗教、他宗団にも共通して教えの中心に据えられていることを指摘し、宗教排他主義から、宗教包括主義へ、更には宗教多元主義へと提唱した ジョン・ヒックに倣って、イエスの唱えた「黄金律」も自然の掟に従う教えであることを強調しておきたい。ジョン・ヒック著、間瀬啓允訳、『宗教がつくる虹』、岩波書店、1997、259-273頁を参照。